

大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業 事後評価結果

大 学 名	慶應義塾大学
-------	--------

◇大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業プログラム委員会における評価

(総括評価) B	目的はある程度実現された。
(コメント)	
<p>拠点大学の国際化については、大学組織として国際化を進めるため、国際担当常任理事を室長とし国際連携推進室を再編している。また、教育の国際化のための質の高い教員の採用により、教育の質が高まっている。KAIST（韓国）、清華大学（中国）と国際連携教育プログラムを開始し、欧米8大学と協力協定を締結し、研究協力を積極的に推進したことは評価できる。</p> <p>英語による授業のみで学位が取得できるコースについては、環境情報学部において開設された「GIGA Program」を契機として、学部としての国際化を充実・増強してきた取組は評価できる。当該取組を、全学の「国際化」の牽引役を果たすものと位置付けて取り組むことが望まれる。</p> <p>留学生受入のための環境整備については、受入重点国において留学生獲得や大学情報を発信しているとともに、留学生向け奨学金や混住宿舎の整備も実施している。</p> <p>目標の達成状況については、大学間交流協定等に基づく交換留学における派遣学生数が計画時から3.3倍と目標を大きく上回っている。一方で、外国人教員数は計画時から増加しておらず、外国人教員比率は目標を大きく下回っている。また、留学生受入数の学士課程については、目標を達成しているものの、博士課程、修士課程、短期留学生及び研究生等については、優秀な留学生の確保に努めてはいるが目標に届いていない。目標達成に向けての改善策（外国人教員採用に関するインセンティブの導入や短期受入プログラムの質を伴う拡充等）は検討されており、概ね評価できるものの、目標達成に向けた意識が大学全体に浸透しなかったことが、目標を十分達成していない要因となっている。</p> <p>今後の展開及び高等教育の国際化に対する貢献については、大学院において、英語による授業のみで学位が取得できるコースに在籍する日本人学生数が、全体の47%（平成26年5月1日現在）を占めていることは極めて特徴的であり、高等教育の国際化が期待できる。平成32年度末の目標達成に向けて、今後は塾長のリーダーシップが発揮できるような体制作りに一層努力し、国際化を戦略的に推進することが望まれる。</p>	